

当報告の内容は著者の著作物です。

「仏教世界の中のイスラーム：南タイ・パタニムスリムの苦悩」

鹿児島大学法文学部 黒田景子

イスラームを知る：その思想と現実、タイの実態から
(東南アジアのイスラーム (ISEA)第6回公開セミナー)

平成22年11月13日(土)午後1時より午後16時
大分県別府市立命館アジア太平洋大学 (APU キャンパス) 大学院棟 (H202)

【報告要旨】

タイは仏教国のイメージが強く、また観光面でもそれを押し出している国であるが、人口の5%はムスリムであり、そのほとんどはタイ南部、マレーシアとの国境地域のいわゆる深南部に集中している。深南部はムスリム人口が80%を超え、日常語がマレー語のパタニクランタン方言を話す、マレー人の世界である。

なぜこの地域が「タイ」なのかは、歴史的にこの地域が東西交易の中心地として政治的・経済的に果たしてきた役割にある。深南部の3県はもともとパタニ王国と呼ばれる東南アジアで初期にイスラーム化したスルタン候国であり、最盛期の17世紀にはオランダ、英国の商館があり、華人や日本の交易者、ムスリム商人の交易拠点として賑わってきた。シャム＝タイはこの地域を交易ネットワークで確保することが重要であり、シャムの朝貢国という形で支配下においていたが、パタニ王国はそれにたびたび反発して乱を起こしていた。

状況が変わったのは19世紀の中頃で、汽船が導入されると大型汽船が停泊できないパタニは避けられて他の中小の港市と共に交易拠点としては没落した。しかしパタニはそれまでにイスラーム教育の東南アジアにおける拠点として小メッカと呼ばれるまでになっていた。ポンドック(ポノ)と喚ばれる学校が多く存在し、メッカ巡礼の準備をするための拠点となり、ここで輩出されたウラマーの著作は現在もこの種の学校の教科書となっている。

パタニにとって不幸であったのは、1909年に英シャム条約によって、タイと英領マラヤの間に近代国境が設置され、タイが自らの近代化のために仏教的価値観を中心としタイ語を国語として全国にしいた徹底したタイ化政策を推し進めたことである。深南部ムスリムの抵抗はタイへの同化を求める政府と軍によって徹底的に封じ込められ、

1950年以降パタニを中心として数多くのムスリム独立運動が起こった。タイ政府は問題の本質を無視したままタイ化を推し進めたため、この地域ではテロが横行し、一旦おさまったかにみえたのちも 2004 年以降再び爆弾テロ、銃撃、放火が繰り返されて、住民の生活を脅かしている。かつて深南部の状況はタイの辺境地方の事件としてなかなか情報が得られなかったが、インターネットの普及により事件の詳細やテロ映像などが世界に配信され、海外からの目にも晒されるようになった。タイ政府はこのなか 2007 年からはじめて深南部でマレー語の教育と「正しい」イスラーム教育をおこなうことにしたがどのような効果がでるのかはまだ未知数である。